

2018年3月18日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「身を挺して」

聖書:マルコによる福音書14:1～10

イエス逮捕の場面において、一点だけ見たい。夜、ゲッセマネの園での祈りを終えて立ち上がった矢先のこと。《祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た》。ここの「群衆」とは一般市民だけというよりも、ローマ軍の兵士がその中に含まれる(ヨハネ福音書では「兵士」が捕らえに来たと記す)。イエスの一行は、国家への抵抗者グループとも疑われていたから当然であろう。

そこで兵士らがイエスを捕らえようとする《居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした》とある。イエス一行の一人が、イエスを守ろうと自ら身を挺したということになるが。

この行為に対して、イエスはどう反応されたか？ ここは、すぐにあの有名な非暴力の格言とも言える言葉を思い起こす。《剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる》この言葉は、マルコ福音書には記されていない。マタイ福音書のみ記されるものである。そしてマタイではその剣を取った者を戒めるわけだが…。

では、マルコ福音書ではどうか？ イエスは、この剣を取って斬りかかった男にどんな戒めを語っているのか？…一言も語っていない。むしろ、イエスは自分を捕らえに来た武装兵士らに語っている。《まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか》と。この場面をどう思い描くか？

イエスを愛する一人の男が、イエスを捕らえに来た武装兵士らに身を挺して守ろうとした。無謀にも、負けると分かっているが…。そのままこの男はイエスが捕らえられる前に殺されていたかもしれない。しかしイエスが、「ここだ、私はここにいる、さっさと私を捕まえたらどうだ」と…兵士らに語る。イエスは、この斬りかかった男を守るがゆえに自ら犠牲になって行ったのではないか。

このところはそういうふうに見ることは出来ないか。無謀にも、武装兵士らに斬りかかったこの男を、イエスはさらに自ら身を挺して救おうとした。そのようにこのところを見ることが出来るのではないかと思う。

イエスは、ここでも一人のために命を賭けて救ったのである。イエスの十字架はすでに始まっている。イエスの十字架とは何か、私にとっての十字架とは何か？ 問い、問われて行きたい。(神谷)